

	<p>エッセイ</p> <p>旅のガッカリ</p> <p>SCE・Net 持田典秋</p>	<p>E-38</p> <p>発行日 2012.8.22</p>
---	--	---

0. はじめに

ガッカリとは、広辞苑によると「①落胆するさま。げっそり。②疲れて気が抜けるさま。」とある。人生の中で、ガッカリを味わうことはずいぶん多い。試験に失敗したとか、女性に振られたとか、あてにしていたお金が入らなかったとか。ガッカリも深刻さが深まると笑い話ではすまなくなるが、そこまで行くとすでにガッカリではない。

ガッカリを味わうのは、旅に出るのことも多い。特に海外旅行の時ほど、ガッカリ度は高い。見知らぬ土地を訪ねるときは、インターネットやガイドブックなどで事前に調べ、ぜひこれを見たいと期待を持って訪れることがよくある。訪問そのものが、それを見る目的の場合もある。しかし、いくら事前調査がしっかりしていても、現物がその通りだとは限らない。つまり期待はずれに終わることがある。

1. 世界三大ガッカリ

有名な世界三大ガッカリには、インターネットなどで取り上げられている次の三つがある。

☆シンガポール：マーライオン

マーライオンは、上半身がライオンで下半身が魚の形をした人魚ならぬライオン魚であり、シンガポールの港の入口に位置し、水を吐き続けている。当然この形にはそれなりの由来もあると思えるが、「なんでこんなところにこんな異様な形をしたものを置くの?」と言いたくなるような代物である。趣味が悪い。



☆ベルギー：アントワープ・小便小僧

小便小僧は、アントワープの街中にあり、さほど広くない通りを歩いても気づかないで通りすぎるくらい目立たない。ちょっと高いところにおいてあるが、小さなものである。このレプリカを公園や自宅の池に配している人がいるが、何を考えてこんなものを飾っているのか、聞きたいものである。おまけにアントワープには、小便少女までであると聞くと、何をか言わんやである。

☆デンマーク：コペンハーゲン・人魚姫



人魚姫もどうということのない

存在である。アンデルセンの童話に基づいた観光用の像だが、思っていたよりもずっと小さく、場所も海のそばとはいえ風光明媚なところではない。港に面し、遠くに風力発電の風車が並んでいるのが見える。もっと良い場所に置けば、きっともう少しは映えるはずだが、借景という感覚は、欧米人に通じるかどうか。

この像は、何回もテロに遭って首が持ち去られたり、腕を折られたりして壊されている。

このうちの一つの代わりに ☆オーストラリア：シドニー・オペラハウスが、ノミネートされている場合もある。

確かにヨーロッパのオペラ座に比べると、歴史も浅く重厚さの点で比較にはならない。パンフレットに出ている写真と違って、近くで見ると海を背景とした全体との調和は大きすぎてよく理解できない。しかし、これは観光施設としては普通であり、ガッカリとして取り上げるまでもなからう。

私も御多分にもれず、三大ガッカリにはガッカリした一人である。いや、本当の所、期待度が高くなかったため、「ふーん、そんなものか。」と思ってそれほどガッカリはしていなかった。

2. 私のガッカリ

世界三大ガッカリよりも、私の旅行で体験した本当のガッカリを取り上げたい。

1) ドイツ：ライン川・ローレライ

「なじーかはしらねーど、ここーろわーびて、むかーしのつーたえーは、そぞーろみにしむー・・・」

小学校の音楽で習ったローレライの歌詞の出だしである。小学校でも昔は文語体の詩で歌っていたのである。曲はハイネの詩に歌詞をつけて歌われたローレライの魔女伝説で、歌声に聞き惚れ急流で難破する船が多かったと、聞いていた。その頃から、ローレライとはどんな所だろう。一度行ってみたいものだと、心密

かに思っていた。

ドイツに初めて出張したのは今から40年近く前、西ドイツの時代。フランクフルトから程遠からぬインゲルハイムというライン川沿いの小さな街にしばらく滞在したので、休日にライン下りを試みた。

船はマインツから出発し、コブレンツまで、両岸のきちんと整った綺麗な街並みや古城や遺跡を眺めながらゆったりと下っていった。広々としたどこまでも連なる人の背丈ほどの葡萄畑は、この地方が有名なドイツワインの産地であることを示していた。

船がかなり進んだ時、これからローレライにかかるとの船内放送の後、ローレライの曲が流された。激流を通るため、これはきっと大揺れになると思いきや、小高い丘の上にドイツ国旗が立っているのどかな景色が見え、難所と気づかないうちに通り過ぎていた。川面にわずかさざ波が立っていたくらいである。ライン川は大きな川で、貨物を積んだ船も盛んに行き交う。しかし、この難所を皆のんびりと通り過ぎてゆくように見えた。

ライン下りは楽しかったが、ローレライには、ひどくガッカリした。船内で飲んだドイツワインも美味しかった。ただ、船の揺れに気づかないほど、酔っ払ってはいなかった。

ドイツには、仕事でもプライベートでも多く訪れる機会に恵まれ、その後も含め都合3度ほどライン下りを楽しんだが、ローレライの状況に変化はなかった。特に3度めは、家人と二人で船の最先端の船先に陣取り、ライン川沿いの風景をのんびりと眺めて楽しんだが、仔細に観察したローレライはそれ以前と同様であった。ライン下りは素晴らしくいつもエンジョイできたが、ローレライだけは期待を大きく裏切ってくれた。それだけ子供の頃の思い出が強く、心に刻まれていたのかもしれない。

このルートは、川沿いの両岸に鉄道が走っていて、列車でも何度か通ったが、圧倒的に船のほうが風情がある。

なじかは知らねど 心侘びて
昔の伝えは そぞろ身に沁む
寂しく暮れゆく ラインの流れ

入日に山々 赤く映ゆる
麗し乙女の 巖に立ちて
黄金の櫛取り 髪の乱れを
梳きつつ口ずさむ 歌の声の
神怪き魔力に 魂も迷う
漕ぎゆく舟人 歌に憧れ



岩根も見為（みや）らず 仰げばやがて
浪間に沈むる 人も舟も
神怪（くすし）き魔歌（まがうた） 謡うローレライ

ローレライは、英語の教科書に出ていたギリシャ神話のサイレンの話と「歌声に魅せられて船人たちが難破してしまう。」という点で良く似たところがあり、元は同じかもしれない。

2) 中国：北京・故宮博物館

北京・故宮博物館を初めて訪れたのは、1986年である。清朝の皇帝がいた紫禁城を博物館にした建物は、極めて広くまた立派なものであった。あまりにも広すぎ、十分に見て回れないほどであるが、展示品はそれなりに沢山あるものの、はっきり言ってガッカリした。

確かに、蒋介石が立派なものを台湾に運んでしまった結果ではあるが、今あの大きさに見合うほどの印象に残る作品の数は少なかった。しかし、持ち去られてから何十年も経っているし、あれほど膨大な国土や人口を抱えている国なのだから、国内各地の昔の優れた作品を集めるとか、現代の芸術家の作品を展示は可能はずである。

更に印象を悪くしていたのは、中国が今ほど開けていなかったこともあって、係員のマナーがなかった。昼食時には、作品のそばに立ち会っている女性係員が、立ちながら弁当を食べていたのである。それもご飯がたくさん入っておかずの少ない、日本で昔あったいわゆるドカベンであったのも興ざめであった。見学者は、勝手に見ていってくれみたいと感じられた。その上トイレのドアも付いていない。

これはガッカリというより、何か寂しさを感じた。

その後も2度ばかり訪れ、その時は弁当を食べている係員は見当たらず、トイレにドアも付けられていたが、紫禁城という入れ物にふさわしく中身が充実していたとは思えなかった。

台北の故宮博物館を訪れた時に、このガッカリの理由が一気に解決した。そこにあるものは、骨董品と言われるものが主体だが、彫刻も、書も、絵画も、陶磁器も、皆今でも新鮮な輝きを持つ素晴らしい作品の数々であった。しかも数が膨大で、十分な手入れをしながら、展示しているのは在庫の3分の1だと聞いた。

歴史を振り返れば、昔は確かにこれらの作品の住まいとしては紫禁城がふさわしかったであろう。しかし、歴史にればたらはないが、もしそのまま北京に残されていたら、相当期間作品に対しての手入れは不十分であったであろうし、ことによると紅衛兵たちに持ちだされ、破壊されたり、二束三文で売り飛ばされていたかもしれない。このようなことを想像すると、これらの作品にとって、台湾行きは必然だったのかもしれない。

この私の2つのガッカリには違いがある。故宫博物館は、世界3大ガッカリと似ているガッカリさである。ところが、ローレライはこれとはまったく違って、あくまで私自身の思い出の強さが招いたガッカリである。見てしまえばガッカリだが、やはり見てよかったと思う。子供の時から何十年も夢に描いていたことに会えたのだから。

旅に出たら、ガッカリとは行かないまでも小ガッカリには多数遭遇する。また常に危険とも隣り合わせである。しかし、旅ではそれよりも大きな感動を受けることの方が、はるかに多い。何処の国のどんな文化にも。この感動や感激を求め、私は家人と一緒に今でも旅を続けている。